

分娩見学が看護学部学生に与える影響 —早期体験学習としての分娩見学—

飯島 亜樹¹⁾ ・ 宮澤 純子¹⁾

【要旨】

本研究の目的は、母性看護実習よりも早い時点で分娩に立ち会った学生の体験が、学生自身の分娩に対する感情、学習意欲、ライフプランにどのような影響を与えたのかその変化を明らかにし、またこの分娩見学を早期体験学習としてとらえることが可能であるのかどうか検討することである。対象は看護大学1年次に分娩見学を行った学生4名である。方法はインタビュー法である。録音されたインタビューから逐語録を起し内容分析を行った結果、分娩見学前後の変化として89個のコードが抽出され、【学習意欲の向上】【分娩見学の効果に対する自覚】【分娩に対するイメージ】【自身の分娩・子育てに対するイメージ】【児に対するイメージ】【周囲の人々の支え】【母親への感謝】【命の尊さに関する思い】の8個のカテゴリーに分類された。これらの内容から母性看護学の学習以前の分娩見学であっても、分娩に対するイメージの肯定的な変化、出産・育児に関する考え方の変化、親への感謝、生命誕生の感動などを母性看護学実習での分娩見学と同様に体験することが可能であること、分娩見学は看護職としての自己のあり方を考える機会になり、その後の学習に対する意欲を向上させる可能性があることが示唆された。

キーワード：分娩見学、看護学生、学習意欲、内容分析、早期体験学習

I. はじめに

母性看護学実習における分娩見学は、学生にとって経験から多くの学びを得ること、学習意欲を高めること、出産や育児に対する考え方に影響を与えることなど、学習としての意味が非常に大きいといわれている。特に、近年の核家族化、地域社会との関連性の希薄さなどの影響により、小さな子どもと接触する機会の少ない成熟期移行期にある看護大学生にとって、分娩見学が自己の母性や性役割について理解を深め、母性意識を発達させるという報告は多い（長島ら、2001、鈴木、2004）。

¹⁾ 城西国際大学看護学部看護学科

本学看護学部では、1 年次より自らの看護に関する感心事や興味に基づいたテーマに沿って調査する低学年でのゼミ活動を行っている。このゼミ活動を通して、自ら考え行動する能力と、共通の話題について学生が主体となって理解を深め、地域社会で活躍できる人材の育成を目指している。今回、母性看護学を学習する以前の看護大学 1 年生が、「分娩期に有効なコミュニケーション技術とは何か」について調査するゼミ活動中に、分娩に立ち会う機会を得ることができた。分娩見学に関する先行研究の多くは、母性看護学や助産学実習における分娩見学の効果を調査したものが殆どであり、実習以外の機会で学生が分娩に立ち会った経験について研究したものはほとんどない。もし、この時期の分娩見学が、学生の学習意欲を高め、これによって実習とは異なる効果が得られるのであれば、入学して間もない時期に現場を体験して専門教育への動機づけとする早期体験学習（柳ら、2002）としてとらえることもできる。そこで本研究では、母性看護学実習以前に分娩に立ち会った学生の体験が、学生自身の分娩に対する感情、学習意欲、ライフプランにどのような影響を与えたのか、その変化を明らかにし、またこの分娩見学を早期体験学習としてとらえることが可能であるのかどうか検討することを目的とした。

Ⅱ．方 法

1．対 象

研究対象者は、看護大学 1 年次に分娩見学を行った学生 4 名のうち、研究同意が得られた者とした。

2．調査方法

方法はインタビュー法を用いた、質的帰納的デザインである。インタビューは 2015 年 9 月の期間に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を 1 名ずつ行い、所要時間は 30 分程度とした。インタビューを行う場所は、予め準備したプライバシーが保てる個室とし、対象者の許可を得たうえで対象者の語りを IC レコーダーに録音した。インタビューの内容は、分娩見学前後の分娩の捉え方、対児感情、学習意欲の変化とした。この分娩見学は、児が娩出する直前の分娩第 2 期から第 3 期までの見学であった。学生が分娩に立ち会うことに対する承諾は、本人と夫より事前に得た。

3．分析方法

調査で得られたデータを基に Krippendorff の内容分析 (Klaus, 1980 三上他訳 1989) に準拠し分析を行った。具体的な分析手順は、まず録音されたインタビュー時の会話から、逐語録を起こした。逐語録の各発言の意味を損なわないように意味のある内容ごとに切片化しラベルを付けた。ラベルを意味内容から類似性でまとめカテゴリー名を付けた。分析の解釈の信

頼性・妥当性を確保するために、質的研究者からのスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

研究対象者には、協力依頼時とインタビュー開始時の2回、研究の目的、方法を説明した。協力は任意であり、参加・不参加により不利益が生じることがないこと、インタビューの途中であっても辞退が可能であることを文書と口頭で説明した。また、個人情報の保護、データの取り扱いと管理、論文投稿を行うことを事前に説明し、同意は同意書への署名によって確認した。なお、本研究は、城西国際大学看護学部倫理委員会の承認（承認番号：27-6号）を得て行った。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性

対象者4名の年齢は19～20歳、性別は全員が女性であった。きょうだいがいる者は3名おり、その内訳としては、1歳下の弟がいる者が1名、4歳下の妹と7歳下の妹がいる者が1名、3歳下の弟と5歳下の弟がいる者が1名であった。うち1名はきょうだいの出産に立ち会った記憶が曖昧ながらも残っていた。家族形態は、両親と同居が2名、単独（一人暮らし）が2名であった。

2. インタビュー内容の質的分析

分析において4名の逐語録を分析した結果、分娩見学前後の変化を示す89個のコードがあり、8個のカテゴリーに分類された。抽出されたカテゴリーとコード数の割合を表1に示す。その後全体を、分娩見学による学習意欲の変化と、分娩見学によるイメージの変化の2つに分けて分析した。以下、カテゴリーを【 】内、研究対象者の語りをコードとして「 」に表記する。

(1) 分娩見学による学習意欲の変化

出産を見学したことで、今後の看護学の学習に対するやる気や姿勢に変化はありましたか？という質問に対しては、【学習意欲の向上】と【分娩見学の効果に対する自覚】の2つのカテゴリーから構成されていた。結果を表2に示す。

表 1 抽出されたカテゴリーとコード数

カテゴリー	否定	肯定	否定・肯定 の区別不可	全体
学習意欲の向上	1 (1.12%)	8 (8.99%)	1 (1.12%)	10 (11.24%)
分娩見学の効果に対する自覚	2 (2.25%)	9 (10.11%)	0 (0.00%)	11 (12.36%)
分娩に対するイメージ	10 (11.24%)	11 (12.36%)	3 (3.37%)	24 (26.97%)
自身の分娩・子育てに対するイメージ	3 (3.37%)	9 (10.11%)	0 (0.00%)	12 (13.48%)
児に対するイメージ	1 (1.12%)	5 (5.62%)	6 (6.74%)	12 (13.48%)
周囲の人々の支え	0 (0.00%)	5 (5.62%)	0 (0.00%)	5 (5.62%)
母親への感謝	0 (0.00%)	10 (11.24%)	0 (0.00%)	10 (11.24%)
命の尊さに関する思い	0 (0.00%)	5 (5.62%)	0 (0.00%)	5 (5.62%)

表 2 分娩見学による学習意欲の変化

カテゴリー	情報 単位数	否定的な語り	肯定的な語り	否定・肯定の区別不可
学習意欲の向上	10 (11.24%)	母性以外の教科については、特に何とも思わなかった。	- 分娩の感動とか印象とかが残っているので、波はあるけど全ての勉強を頑張りたいと思った - 出産の瞬間を見たからか、母性はきちんと勉強したいと思った(2) - ますます母性を勉強しなければと思った - 母性看護学に興味がわいた(2) - これは小児も勉強しないといけないと思った - 国家試験に向けての勉強の後押しになった	今回分娩を見学したことで、領域実習が始まったら学生でもできることは何かをみつきたい
分娩見学の効果に対する自覚	11 (12.36%)	3年生の実習では(今回の経験は)あまり活かされるとは感じない(2)	- 人体の構造や機能とかも、後から習った時に理解が深まった気がする - 分娩見学の後に習った母性看護学概論では、苦手だったホルモンのこともなぜか頭に入りやすかった - 実際に役割を見たら、自分も助産師になりたいと思った(3) - 助産師はやっぱりいいなって思った - 今まで曖昧だった助産師という仕事のイメージがついた(2) - 一生懸命勉強して、自分も早くこういう仕事に就きたいと思った	

【学習意欲の向上】では、「出産の瞬間を見たからか、母性をきちんと勉強したいと思った」「ますます母性を勉強しなければと思った」「母性看護学に興味があった」といった母性看護学に対する学習意欲の向上を示す語りが4名全員から聞かれた。その他の科目に対しては「これは小児も勉強しないといけないと思った」「国家試験に向けての勉強の後押しになった」という語りが認められる一方で、「母性以外の教科について、特に何とも思わなかった」という語りも認められた。また、「今回分娩を見学したことで、領域実習が始まったら学生でもできることは何かをみつけない」との語りも聞かれた。

【分娩見学の効果に対する自覚】では、2名から「3年生の実習では（今回の経験は）あまり活かされるとは感じない」と語られていた一方で、「人体の構造や機能とかも、後から習った時に理解が深まった気がする」との語りもあった。また、助産師という仕事への興味に関しては、以前から助産師を志している1名は「助産師はやっぱりいいなって思った」と語っており、他の3名は「実際に役割を見たら、自分も助産師になりたいと思った」や「今まで曖昧だった助産師という仕事のイメージがついた」と語っていた。

その他、母性看護学に関する知識がほとんどない状態で分娩見学を行ったことに対する思いとして、対象者である4名全員が「事前に分娩見学ができることを知っていた方が母性看護学に関する学習を事前に行って臨めたと思う」と回答していた。しかし、2名の学生は、「頭で考えなかったために、感動が大きかった」などの理由から、事前学習をしないで分娩見学を行ったことに対して「良かった」と語っていた。他2名も、事前学習の不足はあったとしたものの「事前に学習できても学習できなくても、どちらでも良かった」と語っていた。

(2) 分娩見学によるイメージの変化

分娩見学によるイメージの変化では、【分娩に対するイメージの変化】【自身の分娩・子育てに対するイメージ】【児に対するイメージ】【周囲の人々の支え】【母親への感謝】【命の尊さに関する思い】の6つのカテゴリから構成されており、3つの意味内容に集約された。結果を表3に示す。

表3 分娩見学によるイメージの変化

カテゴリー	情報 単位数	否定的な語り	肯定的な語り	予測不明
分娩に対するイメージ	24 (26.97%)	・お母さんから痛みは鼻からスिका以上だって聞いていたけど、生で見たら、すごい痛いんだとか、大変なんだなっていうのは話を聞くより伝わった ・ドラマで出産のシーンを見たことがあったけど、実際の辛さや迫力は全然違った ・産んでいるときは苦しそうだった ・すごく辛そうで痛そうだった ・大変という言葉では言い表せないほど辛そうだった ・普通の女性だったら他の人には絶対に見せないような辛くて痛そうな表情をしていた ・子どもを産むのはこんなに痛くて大変なことなんだって思った ・出血があんなに出るとは思わなかった(2) ・血のにおいがずっと鼻に残っていた	・出産のイメージはいい方に変わった ・痛いんだけど、絶対に悪い経験ではないと思った ・生まれた瞬間はありがとうって言って嬉しそう、幸せそうに見えた(2) ・皆に祝福されて幸せそうだった(3) ・私が思っていたよりも、大きい声を出すとかじゃなくて、スムーズな出産に見えた ・頑張ろうっていう姿勢を感じた ・痛そうだけど現実を知れて良かった ・今はお産イコール痛いだけじゃなく、その後の幸せな気持ちも想像できるようになった	・胎盤の印象が強かった。あのドロって出てくる感じにびっくりした ・助産師さんがいきむときにお腹の上を押しているのが、すごく印象的だった ・実際、赤ちゃんっていっても出てくる場所からしたら大きいから出てくる場所が想像できなかったけど、本当に出てくるんだあって思った
自身の分娩・子育てに対するイメージ	12 (13.48%)	・自分が産むときにこれを経験しないと赤ちゃんに会えないのかと思うと、一瞬怖くなった ・自分が産むことに対して少し怖くなった ・分娩を見たからといって、とくに女性としてとか何とも思わなかった	・子どもはいいやって思っていたけど、分娩を見て子どもが欲しいなって思った ・痛い思いをするのは嫌だけど、それでもいいなって思った ・自分には出来なそうって思ったけど、でもいつか自分も産みたいという思いは変わらなかった ・女性だからできること、経験しないとわからない母親の気持ちとか、陣痛の痛みも経験してみたい ・自分も自分の赤ちゃんに早く会いたい ・子育てっていいなって思った(2) ・自分の命以外に守れるっていう感覚を経験できる女性で良かった ・一緒に分娩を感じられる旦那さんがいいなって思った	

表3 分娩見学によるイメージの変化（続き）

カテゴリー	情報 単位数	否定的な語り	肯定的な語り	予測不明
児に対するイメージ	12 (13.48%)	・赤ちゃんの顔は見えなかったし、可愛いとはあまり思わなかった	・皆が普通に生まれてくるわけじゃないから、無事に生まれて良かったって思った ・小さい手でもちゃんと爪もあって、髪の毛も生えていて、目も開いていて、人間の子どもだって思った ・自分の子どもでもないのに、愛くるしい、可愛いというお母さんみたいな気持ちで自然と出てきた ・赤ちゃんが目が合った気がしたので、その瞬間から可愛いと思った ・赤ちゃんがとても清潔なものに感じた	・想像していたよりも小さかった ・生まれたばかりの時は赤黒いんだって思った ・赤ちゃんにどうしてあげたらいいのかと考えていた ・可愛いよりも、びっくりした方が大きかった ・生まれた！という驚きの方が強くて、元気に生まれたとかよりもその瞬間に驚いていた ・お母さんの様子から、良かったという思いが先で赤ちゃんのことは考えられなかった
命の尊さに関する思い	5 (5.62%)		・一人の出産にこんなにたくさんの人が関わっていて、すごいことだと思った(2) ・赤ちゃんだけどちゃんと生きているんだということを少し実感した ・同年代の人とは違う、命の大切さみたいなものを感じた ・地球上に一人の人間が増えた場面にしたことをすごいと思った	
周囲の人々の支え	5 (5.62%)		・旦那さんも立ち会っていて、助産師さんも先生も頑張れって、そこにいる皆で頑張っている感じだった ・色々な人におめでとうって言われて、旦那さんにもありがとうって言われて、赤ちゃん抱っこできて、幸せそうだった ・旦那さんが本当に喜んでいる様子が印象的だった ・動揺しているのは私たちだけで、スタッフの人は皆冷静で落ち着いていた(2)	

表3 分娩見学によるイメージの変化（続き）

カテゴリー	情報 単位数	否定的な語り	肯定的な語り	予測不明
母親への感謝	10 (11.24%)		・分娩を見たからかはわからないけど、普段よりお母さんがいい人に見えて、お母さんに対して反抗的な感情もあまりなくなった ・産んだお母さんは強いと思った ・お母さんもこうやって頑張ったのになって思った(3) ・お母さんにこういう過程で産んでもらったことに嬉しいと思った(2) ・産んだ時にすごく感動している様子を見て、たぶん自分の親も同じ気持ちだったかなって嬉しくなった(3)	

①分娩進行中・出産の瞬間・出産直後の産婦さんを見て、どのように感じましたか？という質問に対しては、【分娩に対するイメージ】【自身の分娩・子育てに対するイメージ】の2つのカテゴリーから構成されていた。

【分娩に対するイメージ】は、「すごく辛そうで痛そうだった」「大変という言葉では言い表せないほど辛そうだった」といったような否定的な語りが、対象者である4名全員から語られていた。しかし、全員が～けど、でも～という逆接の接続詞を用いて最終的には「痛いけど、絶対に悪い経験ではないと思った」「痛そうだけど、現実を知って良かった」のように肯定的な語りに変換させていた。また、分娩のイメージについては、テレビのようなメディアから得た情報や、きょうだいの出産時の様子について自身の記憶や両親から聞いた話が基礎となっており、「ドラマで出産のシーンを見たことがあったけど、実際の辛さや迫力は全然違った」「出血があんなに出るとは思わなかった」といったような否定的な語りと、「私が思っていたよりも、大きな声を出すとかじゃなくて、スムーズな出産に見えた」「お産イコール痛いだけではなく、その後の幸せな気持ちも想像できるようになった」といった肯定的な語りがあった。また、産婦が周囲の人たちから祝福されて幸せそうに見えたといった語りは4名全員から聞かれていた。

【自身の分娩・子育てに対するイメージ】では、「自分が産むときにこれを経験しないと赤ちゃんに会えないのかと思うと、一瞬怖くなった」や「自分が産むことに対して少し怖くなった」という否定的な発言が2名より聞かれていたが、「子どもはいいやって思っていたけど、分娩を見て子どもが欲しいなって思った」という気持ちの変化や、「陣痛の痛みを経験してみたい」、「自分も自分の赤ちゃんに早く会いたい」「子育てっていいなって思った」のように、今後の自分自身と重ねて表現されている語りも同時に見られていた。

②生まれたばかりの赤ちゃんを見てどのように感じましたか？という質問に対しては、【児

に対するイメージ】と【命の尊さに関する思い】の2つのカテゴリーから構成されていた。

【児に対するイメージ】では、「自分の子どもでもないのに、愛くるしい、可愛いというお母さんみたいな気持ちが自然と出てきた」と児に対して可愛いと感じた人は1名のみであった。この1名は、「赤ちゃんの頭が出た時に顔がちょうどこっちを見ていて、目が合った気がしたので、その瞬間から可愛いと思った」と語っていた。他の3名に関しては、「可愛いよりも、びっくりした方が大きかった」「良かったという思いが先で赤ちゃんのことは考えられなかった」のように、児が生まれた瞬間に対する驚きや安堵感が優先され、可愛いという思いは出産後に新生児が落ち着いた状態になってから感じたようであった。

【命の尊さに関する思い】では、4名全員が肯定的に捉えており、「同年代の人とは違う、命の大切さみたいなものを感じた」「地球上に一人の人間が増えた場面にいたことをすごいと思った」といった語りが聞かれていた。

③出産の様子で、産婦さん以外の人に感じた感情がありましたか？という質問に対しては、【周囲の人々の支え】と【母親への感謝】の2つのカテゴリーから構成されていた。

【周囲の人々の支え】では、「色々な人におめでとうって言われて、旦那さんにもありがとうって言われて、赤ちゃん抱っこできて、幸せそうだった」や、「一緒に分娩を感じられる旦那さんがいいなと思った」のように、家族やスタッフが分娩に参加している様子が多く語られていた。

【母親への感謝】では、4名全員から否定的な発言が語られることはなく、「お母さんもこうやって頑張ったのかなって思った」「産んだ時にすごく感動している様子を見て、たぶん自分の親も同じ気持ちだったかなって嬉しくなった」のように、特に自分の母親に対する思いが多く語られていた。

IV. 考 察

1. 早期の分娩見学と母性看護学実習において分娩見学を行うこととの共通点

看護学部の学生に対する分娩見学の実施の多くは、学内での母性看護学履修後の臨地実習で行われることが一般的であり、多くは、分娩経過から産婦の特徴を理解し必要な看護が分かる、分娩経過から回復していく適応過程を理解できる、生命の尊さや自己の母性感を深めることができるといったことを目標に実施している。服部（2003）は、母性看護学実習では満足体験と喪失体験の両方を体験するとある。なかでも分娩見学は、その分娩経過によって会陰切開、縫合処置、急遂分娩の処置等、分娩そのものを否定的なイメージにさせ得る場面を見学することがあると報告している。分娩時の医療処置等の場面のみが印象に残り、それらの必要性が理解できない場合、分娩見学そのものが喪失体験となり、抱いていた分娩に対するイメージが悪いものへと変化してしまうこともあり得るとの先行研究もある（鈴木、2004）。本研究の対象者である学生は母性看護学を学習する以前にあり、分娩経過や分娩時処置の必

要性を理解していない状態で分娩見学を行ったために、分娩見学が喪失体験となる可能性が十分考えられたといえる。実際、学生からは「実際の辛さや迫力を感じて分娩のイメージが変わった」「出血があんなに出るとは思わなかった」といったような否定的な語りが多く認められている。しかし、対象者である4名全員が、分娩を単なる苦痛な場面として捉えるのではなく、子どものために頑張る母親のたくましさや、母子の結びつきを感じ、自分自身で分娩を肯定的なイメージへと変化させていた。これは、母性看護学実習における分娩見学における学生の感情として、陣痛は辛いものであると見学時是否定的・回避的に捉えるが、それを局所のものではなく、頑張る産婦の姿を含めた全体として感じられるように変化するという本多（2006）の報告と同様の結果であった。さらに、本研究において学生が語った「同年代の人とは違う、命の大切さみたいなものを感じた」「地球上に一人の人間が増えた場面にいたことをすごいと思った」という命の尊さに関する思いや、「お母さんにこういう過程で産んでもらったことに嬉しいと思った」「産んだ時にすごく感動している様子を見て、たぶん自分の親も同じ気持ちだったかなって嬉しくなった」という母親への感謝という結果も、母性看護学実習において、分娩の見学によって命の尊さについて考える機会となり、自分が生まれた時にも皆に祝福されたのだろうと実感する学生が多い（徳田ら、2007）との報告と類似した結果となっていた。以上より、早期体験学習としての分娩見学であっても、学生は、母性看護学実習での分娩見学同様の体験をすることが可能であるといえる。

また、鈴木（2004）は、母性看護学実習で分娩見学を行った際に、学生の分娩に対するイメージがよいイメージに変化し、いつか自分も子どもを産み育ててみたいと思うものが増えているとの報告している。本研究においても、「陣痛の痛みを経験してみたい」、「自分も自分の赤ちゃんに早く会いたい」「子育てっていいなって思った」といった、分娩の体験をまるで自分のことのように感じている表現が同様にされていた。つまり、早期体験学習であっても、分娩見学の体験そのものが母性意識発達を促進させる要因になるといえる。これは、大槻（2004）が、母性愛や母性意識は、幼少期から成熟期に達するまでの生育過程において価値観や態度が形成されるため、3年間の母性看護学の授業による影響力は少ないのではないかと述べていることから意味づけができ、分娩見学と母性意識の促進という意味においては、分娩見学を行う時期は問題にはならず、弟妹・乳児との同居経験の有無や、思春期・青年期に身近な人との接触体験が関与すると考えられる。今回の結果においても、自身の妹の出産に関する記憶が曖昧ながらも残っている1名のみから「分娩を見たからといって、とくに女性としてとか何とも思わなかった」という否定的発言が聞かれたが、これは同学生が成長過程において妹という乳児と接する機会があったために分娩見学前から母性意識が高かったと思われ、早期体験学習としての分娩見学の経験よりも見学以前から持ち備えている考え方そのものが影響因子になっていることが考えられる。

一方、分娩見学を早期に行うことによる学習意欲の変化としては、4名全員が「母性看護学をきちんと学びたいと思った」とような母性看護学に対する学習意欲が向上する語りを認

めた。さらには、以前から助産師を志している 1 名の学生を含める全ての学生が「助産師になりたいという気持ちが明確になった」「助産師という仕事のイメージがついた」と将来の目標設定がなされていた。母性看護学実習における分娩立ち会いが学生の感情や心の動きにどのように影響するかに関して、重西ら（2006）は、学生は感情をゆすぶられ、援助者としての自己のあり方を真摯に問うことを行うと述べている。つまり、分娩見学は看護職としての自己のあり方を考える機会になり、その時期が早ければ早いほど、その後の学習に効果的に働くことが考えられる。実際、「分娩見学の後に習った母性看護学概論では、苦手だったホルモンのこともなぜか頭に入りやすかった」や、「人体の構造や機能とかも、後から習った時に理解が深まった気がする」との語りもあり、分娩見学が母性看護学を学ぶ上での導入となった可能性はある。一方で、「母性以外の教科については特に何とも思わなかった」や、「3 年生の実習ではあまり活かされるとは感じない」との否定的な語りも認められており、今回の分娩見学は、学生にとって学習意欲の向上には結びついているものの、今後の看護学全般や実習には具体的にどのように役立つのかの自覚は乏しいものと思われた。

2. 早期体験学習と母性看護学実習において分娩見学を行うことの相違点

母性看護学実習における学生の体験として、伊藤ら（2009）は 24.7%の学生が分娩経過中の産婦及び胎児の観察といった学習内容について再確認し、9.2%の学生が分娩進行に合わせた産婦へのケアに対する緊張感を持っていると述べており、学生の緊張緩和が産むということの凄さや出産の喜び等に伸びやかに意識を向けられるようになり、学びの充実へと繋がる可能性があると述べている。さらに、青柳ら（2008）も、分娩見学中に学生は、「自分に何が援助できるだろう」「何を援助してよいかわからない」という戸惑いの表現が多く、痛みを訴える産婦を前に言葉も行動も委縮してしまう傾向があると述べている。本研究においても、「今回分娩を見学したことで、領域実習が始まったら学生でもできることは何かをみつきたい」との語りもあり、看護学生にして抱く産婦への興味・関心は同様に認められるといえる。しかし、今回は母性看護学を学習する以前であり、分娩見学の目的が単なる見学や体験に留まったため、学生から分娩見学における援助に対する迷いや戸惑いといった発言は全く見られなかった。つまり、母性看護学実習においては、分娩経過を理解し、産婦の援助者になるという目標をもって分娩見学を行うために、積極的な方法で分娩に関わることができなかった際に自責の念を生じることが考えられるが、早期体験学習としての分娩見学においては、何もできない自分を当然のものとして認め、出産の様子や喜びといった雰囲気を感じることに五感を集中できると考えられる。また、寺内ら（2010）は、夫は立ち会い出産では、分娩の情報をメディアや友人から得ており、実際に分娩立ち会いを行ってもイメージしていた出産像と大差は感じないが、陣痛に苦しむ姿は想像以上であると報告していることから、今回の結果が類似した傾向を示しており、早期体験学習による分娩見学は、夫の立ち会い分娩に心理的に近い状態にあるといえる。夫立ち会い出産に関して出口ら（1999）は、分娩前学習をし

た夫の方が具体的な援助行為ができないという理由から分娩立ち会い後に戸惑いを感じた人が多かったと報告しており、さらに、前原（1986）も夫はただいだけでは役割の効果もあがらないで後で不満を残すことになりかねないと述べている。これら先行研究から、男女の差、夫と看護大学生という役割の違いはあるものの、助産師学生が呼吸法やマッサージ法などの実践的な援助を行う場合を除いて、看護大学生が中途半端な情報提供のみで分娩見学を行うと、知識が邪魔をして、逆に看護学生としての役割を果たしたくても何もできないという戸惑いや無力感が生じることが考えられる。つまり、看護学生が分娩見学を行う場合、母性看護学を学習する以前に行う、または実践的で具体的な援助方法を指導・教育した後に行った方が否定的感情を生じにくい可能性が示唆された。

V. 結 論

母性看護実習よりも早い時点で分娩に立ち会った学生の体験が、学生自身の分娩に対する感情、学習意欲、ライフプランにどのような影響を与えたのかその変化を明らかにし、またこの分娩見学をその後の学習意欲を高める早期体験学習としてとらえることが可能であるのかどうか検討することを目的に、大学1年次に分娩見学を行った看護学生4名を対象にインタビューした結果、①分娩見学前後の学生の変化は【学習意欲の向上】【分娩見学の効果に対する自覚】【分娩に対するイメージ】【自身の分娩・子育てに対するイメージ】【児に対するイメージ】【周囲の人々の支え】【母親への感謝】【命の尊さに関する思い】の8個のカテゴリーに分類された。②母性看護学の学習以前の分娩見学であっても、分娩に対するイメージの肯定的な変化、出産・育児に関する考え方の変化、親への感謝、生命誕生の感動を、母性看護学実習での分娩見学と同様に体験することが可能であった。③分娩見学は看護職としての自己のあり方を考える機会になり、その後の学習に対する意欲を向上させる可能性が示唆された。本研究の対象者は4名と少ないため、今後、対象者を拡大する必要がある。また、今回の分娩見学の長期的な影響についても検討したいと考えている。

VI. 謝 辞

本研究の調査にご参加頂いた看護学生の皆様に深く感謝致します。また、研究の主旨をご理解いただき、快くご協力下さいました産婦さんとご家族の皆様、研究をご支援いただきました北原慶幸先生、原田富子師長はじめ、北原産婦人科の皆様に、心よりお礼申し上げます。

文 献

青柳美秀子, 荒木こずえ, 島田祥子 (2008). 産婦の看護を体験することの意味－実習記録の分析から－.

川崎市立看護短期大学紀要, 41-47

出口信子, 米村聡実, 福井奈美子, 前田啓子, 程修司 (1999). 夫の分娩立ち会い体験の自己評価とそ

の関連因子. 母性衛生, 40 (4), 468-472

服部祥子 (2003). 人を育む人間関係論－援助専門職者として, 個人として－. 医学書院

本多洋子 (2006). 分娩見学の学びの分析. 桐生短期大学紀要, 17, 209-214

伊藤良子, 中野雅子 (2010). 分娩期実習における看護学生の体験と学び. 京都市立看護短期大学紀要,

35, 123-128

Klaus Krippendorff (1980). CONTENT ANALYSIS (三上俊治, 椎野信雄, 橋本良明訳 (1989). メッセージ

分析の技法－「内容分析への招待」－). 勁草書房

前原澄子 (1986). 夫立ち会い分娩を助産婦としてどう受け止めるか. 助産婦雑誌, 40 (8), 655

長島玲子, 長廻久美子, 三島みどり (2001). 産婦の看護実習における看護学生の学び－実習後のレポー

トの分析から－. 日本看護研究学会雑誌, 24 (3), 180

大槻優子 (2004). 女子看護学生の母性意識の変化－1 年次後期から 3 年次母性看護学実習終了までの

経年的変化－. 母性衛生, 45 (1), 118-125

重西桂子, 岡崎愉加. 分娩立ち会い実習における学生の体験と指導のあり方. 岡山県立大学保健福祉学

部紀要, 13 (1), 47-56

鈴木樹里 (2004). 分娩見学が看護学生の分娩に対するイメージに与える影響. 神戸市看護大学紀要,

23, 95-100

寺内友香, 野口真貴子, 久米美代子 (2010). 初産婦の夫が立ち会い出産に対して抱いていたイメージ

と実際との相違. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 9 (1), 67-78

徳田真理子, 甲斐寿美子 (2007). 母性看護学実習後における学生の意識変化. 帝京平成看護短期大学

紀要, 17, 21-25

柳久子, 戸村成男, 森淑恵, 江守陽子, 紙屋克子 (2002). 医療・福祉現場における早期体験学習 (early

exposure)－筑波大学医学部専門学群における経験－. 医学教育, 33 (1), 43-49